

船橋市内で初めて確認された
「前方後円墳」出土跡地の記念公園整備に関する陳情について

〔願意〕

船橋市小室町は約3万4000年前の旧石器時代から現代まで、人々の営みが長く続いている土地です。なかでも小室台遺跡から出土した前方後円墳は、船橋市教育委員会の市民向け刊行物「ふなばしの遺跡」で「船橋市内で初めて前方後円墳を発見」と特筆されるなど、歴史的、文化的価値を長く共有すべき存在といえます。

出土地は現在、地元旧家の所有する畑地（現況更地）になっています。

古墳の墳丘部は遅くとも明治時代より前に、旧小室村の畑地利用などにより削平され、失われていたと見られます。地中部についても、船橋市小室土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査により掘り返され、さらに事業着手後の土地造成工事で跡形無くなりました。

しかし、この調査により船橋市域で初めて前方後円墳の存在が確認された事実は意義深く、特定された出土エリアが「船橋小室台遺跡記念公園（仮称）」として整備されれば古代の息吹を今に伝える生の現場になります。小中学校の社会科系校外学習や市民の生涯学習の場としても継続的に活用できます。

船橋市教育委員会文化課（以下、文化課といいます）は、小室台遺跡の詳細な調査記録並びに出土資料類について、船橋市薬円台4丁目25-19、船橋市郷土資料館で保管・展示しているとしており、前方後円墳出土位置の特定は可能です。

市民共通の資産となる公園整備の実現に向けて、貴船橋市議会のご理解並びにご助力をぜひお願い申し上げたく、陳情させていただきます。

〔理由〕

小室台遺跡の前方後円墳は近隣の円墳2基とともに「小室台古墳群」を構成していま

す。一帯は都市計画上、市街化区域に指定されており、埋蔵文化財の調査終了後、住宅の新築が相次ぎ、円墳出土地は個人住宅になりました。

唯一更地で残っているのは前方後円墳の出土地だけです。

船橋市小室町では令和元年7月7日、地元小室公民館において、千葉県から地元向けに「北千葉道路都市計画の原案説明会」が開催されました。その際、国道16号線と同464号線の交点に「船橋小室インター（仮称）」を双方向流出入可能なダイヤモンド型フルインターチェンジとして整備する予定図案が展示パネルで示され、配布資料とともに説明されました。

完成すれば船橋市北部地域の渋滞緩和だけでなく、利便性、多用途性が格段に増し、地域の変容、変貌も加速することが予想されます。

前方後円墳の出土地は第一種低層住居専用地域に指定され、近隣では住宅建設が相次いでいます。現況更地の今のうちに保全策がなされれば、文献上の記録だけでなく、市民の共有資産として種々の持続的活用が可能になります。

地元の全自治会・町会の連携組織である小室地区連絡協議会として広範な視点から検討した結果、市民共通の資産化・公園化による保全は最良の方途であり、喫緊の課題と結論した次第です。現況と具体的理由、公園の持続的活用方策案は下記の通りです。

記

1. 小室町と陳情者「小室地区連絡協議会」について
 - (1) 小室町について
 - (2) 陳情者「小室地区連絡協議会」について
2. 小室台遺跡と前方後円墳、円墳の現状、船橋市教育委員会の見解について
 - (1) 小室台遺跡について
 - (2) 前方後円墳、円墳の新発見と現状について
 - (3) 船橋市教育委員会文化課の見解について「史跡指定は困難」
 - (4) 小室地区連絡協議会の受けとめについて「専門家目線より市民感覚」
3. 市民の共有資産「船橋小室台遺跡記念公園（仮称）」の活用について
 - (1) 「体感できる古墳時代」を学ぶ校外学習の現場として
 - (2) 生涯学習フィールドワークの場として
 - (3) 北千葉道路・船橋小室インターチェンジ（仮称）整備に伴う将来性について

1. 小室町と陳情者「小室地区連絡協議会」について
 - (1) 小室町について

小室町は船橋市最北部、千葉ニュータウンの一角に位置しています。今から40年前の昭和54年、北総線小室駅前、ニュータウン街開き式典が最初に営まれた「千葉ニュータウン始まりの地」です。

住民構成はエリア別に▽室町・江戸期から続く旧小室村、▽千葉ニュータウン計画地域、▽小室土地区画整理事業後の新住宅地域の3グループに分かれています。

船橋市住民基本台帳によると、小室町の人口は平成31年4月現在、6,166人。この5年で15.1%増加し、住宅新築ブームが目立つ昨今の状況からさらに増えると思われる。

高齢化の一方、0～4歳児が小室町人口の5.1%を占め、船橋市の全市平均4.1%を1.0ポイント、同様に35～39歳は0.3ポイント上回るなど年齢構成においても近年、持続性ある大きな変化が目立って現れています。

小室土地区画整理事業の完了後、大手不動産会社による大規模宅地開発ならびに近隣部での小規模宅地化が相次いでいます。さらに、インターネットの不動産広告などを利用し、現地への遠近に関わりなく分譲宅地・建物情報を得られる昨今の社会情勢から、小室町への新規転入者は北海道から九州まで全国に及んでいます。現地では今日現在も数10軒の住宅新築工事が数か所で同時に行われています。

町丁別人口では、船橋市内計328町丁のうち北本町1丁目(6,275人)に次いで9番目に多く、今年度内に北本町1丁目を上回るのは確実な情勢です。

(2) 陳情者「小室地区連絡協議会」について

小室地区連絡協議会は▽小室中央自治会(櫻井實会長)、▽小室第一自治会(佐藤一良会長)、▽小室ハイランド自治会(手嶋正博会長)、▽B棟あおぞら町会(香川勝範会長)、▽小室さざんか町会(佐藤憲弘会長)、▽小室町会(小林慶亘会長)、▽小室なのはな自治会(大森昭仁会長)、▽プラウドシーズン船橋小室自治会(間瀬佳典会長)、▽小室はなみずき自治会(岡田祥英会長)の計9自治会、町会で構成しています。

船橋市の地区連絡協議会では豊富地区エリアに位置していますが、小室町は町丁別単体で市内有数の人口を抱え、町域の大半を住宅地が占めている地域特性などから町内独自の連携組織が必要となり、前記9自治会、町会が共同して小室地区連絡協議会を組織しています。

小室町域の住民ニーズを踏まえた「明るく住みよい街づくり」を共通目的とし、小室地区連絡協議会規約に基づき、小室公民館などを拠点として種々の取り組みを通年間断なく展開しています。

本件陳情は上記自治会長、町会長9名、小室地区連絡協議会三役会4名(岸美隆会長、

副会長、副会長、事務局長)、計13名が住民を代表して行っています。

2. 小室台遺跡と前方後円墳、円墳の現状、船橋市教育委員会の見解について

(1) 小室台遺跡について

小室台遺跡は北総線小室駅の北東部にあり、室町、江戸時代から現代まで旧小室村の畑地や炭焼き場などに利用されてきました(現在は住宅地です)。人々の営みの歴史は約3万4000年前の旧石器時代まで遡り、石刃などの石器類が8か所から集中的に出土しました。

前方後円墳の出土地から南へ約200mの距離にある小室上台遺跡(現本覚寺境内)は、小室台地上にある遺構全体として一体の関係にあります。

小室上台遺跡出土品のひとつ、女性の胸を表現した素朴な造形の土偶は縄文時代早期、今から約9000年前の縄文人の作とみられています。弥生時代をはじめ現代に至るまで小室台の土のなかで眠り続けていました。

東京国立博物館(上野)は2018年夏、縄文美術の造形の変遷をはじめ奥深い多様性をテーマとした特別展「縄文—1万年の美の鼓動」を初めて開催し、このなかの「はじまりの土偶」コーナー展示4点のひとつにこの土偶を選んでいました。これまで全国で出土した土偶計約1万8000点の中から選抜されたものです。

旧来の考古学的観点だけではなく、縄文美術史の視点から造形美が見直された結果といえ、図録集「特別展 縄文—1万年の美の鼓動」(東京国立博物館など編集)では本文だけでなく、巻頭の縄文美術史年表にも写真が掲載されました。

この土偶は同年秋、パリ市で開催された日仏友好160年記念イベント「ジャポニスム2018」でも展示されています。縄文特別展の展示品の中から美術的価値や輸送時の質量などを基にさらに選抜された中に入ったもので、ほかの展示とともに、フランスの皆さんをはじめ総数300万人を越す来場者に披露されました(外務省ホームページより)。ただし、文化財としては現時点で知り得る限り、未指定です。

古墳時代の竪穴住居は計40軒が確認され、本件要望に関わる「小室台古墳群」は小室台地の東端で発見されました。造営当時、神崎川沿いの低地から西側にある小室台地を見上げると、3基の古墳が南北方向に連なって見える位置関係にあり、威容を誇っていたと推定されます。

小室の地名の起こりは鎌倉時代末期、元徳3年(1331年)の千葉氏古文書に見られる「古牟呂(こむろ)」です。以後、中近世を経て現代へ連綿と続きますが、ここでは略します。

埋蔵文化財調査は小室土地区画整理事業（平成27年11月事業完成）に伴い、船橋市教育委員会によって平成20年11月から24年2月まで3年3か月間、延べ45,615㎡を対象に行われました。

成果は船橋市教育委員会の報告書「小室台遺跡（1）〈I〉」及び「同〈II〉」計2分冊に詳述されています。

（2）前方後円墳、円墳の新発見と現状について

古墳の形態は造営時期などにより様々に変遷していますが、「古墳時代の象徴は」と問われれば、人々が真っ先にイメージするのは前方後円墳ではないでしょうか。

千葉県は前方後円墳の墳墓数が全国一多いことで知られていますが、船橋市域は首府・首都近郊にあって早くから土地利用が進み、墳丘部が削平されるなどして存在そのものが姿を変え、調査の困難な地域のひとつとされています。

平成29年9月、小室公民館で地域歴史講座が開催され、船橋市埋蔵文化財調査事務所による講義がありました。「近年の船橋市の古墳の調査」に関するテーマでは、「船橋市の古墳はこれまで調査がなかったことから実態はわからない部分が多く、採集された埴輪や残された墳丘の調査により内容が推測されていた」としています。そのうえで、「平成23年の小室台遺跡（1）での古墳の調査を皮切りに、平成26年度の峰台遺跡（3）、平成27年度の宮本台遺跡群（61）でも古墳の調査が行われ、これまで蓄積された古墳時代の集落の調査と合わせて考えることにより、船橋市内の古墳の実像が明らかになりつつある」と紹介されました。

船橋市では平成20年代になって古墳の調査が本格化し、なかでも小室台遺跡の前方後円墳の出土・確認は画期的成果だったことがうかがえます。千葉県の前方後円墳分布図のなかで、長年にわたり空白だった船橋市域に、ごく一部とはいえ、最初の点がようやく打たれました。

小室台古墳群の発見は台地東端の前方後円墳に始まり、以後南側へ円墳が相次ぎ出土、墳墓として確認された順番に小室台1号墳（前方後円墳）、2号墳、3号墳（いずれも円墳）と名付けられました。発掘調査を始めた当時、前記の通りすでに畑として利用され、墳丘部は削平されていました。地中部も調査のためすべて掘り返し、逐次記録されているものの原形は残っていません。

畑を掘り下げていったところ、表土の数10cm下から前方後円墳の底辺部が現れ、埋葬されていた大刀（たち）を船橋市内で初めて発見しました。大刀の出土は、前方後円墳とともにヤマト政権の覇権の地方でのあり方を示し、船橋市の古墳時代を語るうえで、学術的、文化的に意義深い成果といえます。

円墳の出土地は調査終了後、2か所とも宅地になりました。今では民家が新築され、市民が暮らしています。

前方後円墳の出土エリアは更地のままで、一部に市道（幅員4m）が通っています。

（3）船橋市教育委員会文化課の見解について「史跡指定は困難」

小室地区連絡協議会が令和元年7月4日、文化課に「船橋市史跡」指定について相談したところ、「古墳の原形を留めていないので史跡指定は困難」という見解でした。

調査開始時点ですでに墳丘部はありません。古墳底辺部の発見に伴い、地中をすべて掘り返し調査、記録し、土地造成工事に移行したので原形が無いことが主な根拠とされています。

文化課によると、計画されている土地区画整理事業とその後の土地利用により遺跡は消失するため、小室土地区画整理組合の設立準備段階から、文化課並びに市長部局都市整備担当課、地元地権者の間で協議を重ねてきました。

この結果、造成工事が始まる前に発掘調査をして記録を保存することとし、計画対象地域についてまず確認調査、次いで本調査が行われました。文化課は地権者の意向に沿って行った調査方法であるとしています。

結果として、古墳時代の人々の営みの「生の跡」は小室台遺跡では完全に失われました。7世紀とみられる造営以来、1000数百年の時を重ねて眠っていた船橋市域唯一の前方後円墳は今や跡形無いのが現況となります。

文化課の7月4日の説明などによると、出土時、埋蔵文化財としての「保存状態は悪かった」（文化課）そうで、新発見には違いないものの、全長32mという規模自体、とくに目新しいものではなく、これらをもってしても史跡指定は困難という趣旨でした。

平成29年8月、文化課が発行した「船橋の遺跡マップ」では、小室台遺跡について「大型の前方後円墳の一部が見つかり」と記載しています。しかし、わざわざ「大型の」という形容を添えるほどのものではない、というのが文化課本来の見解のようです。

公的刊行物として、遺跡マップを手にした子供たちをはじめ一般市民の誤解を招く表現ですが、根本は文化財により関心を持っていただきたいという狙いからでしょうか。

（4）小室地区連絡協議会の受けとめについて「専門家目線より市民感覚」

本件要望書で小室町民が公園化を要望している主な動機は、考古学的見地からだけのものではありません。ふるさと船橋にも古墳時代のシンボル、前方後円墳が確かに存在していたという素朴な喜び、船橋市民としての誇りは、文化財に対する関心をより深めるきっかけとなり得るからです。

小室地区連絡協議会は当初、市史跡指定による保全を模索していましたが、文化課の

見解が明らかになったことで困難になり、「何とか後々まで伝えられる方策を」と再考した結果、導き出したのが記念公園整備計画です。

専門家の目線（価値観）ではたいしたことは無くても、市民感覚では大変貴重な出土跡地です。今からできる事、今なら間に合う事として、少なくとも前方後円墳底辺部の輪郭線を地面に表現することは可能と見られます。

船橋市域で平成10年代まで前方後円墳がひとつも確認されなかったのは、ひとえに戦後、無秩序に近い状態で行われてきた乱開発、ミニ開発の結果ともいえ、いわば「負の足跡」です。小室台遺跡の前方後円墳は記録保存されており、同列に考えることは適当ではありませんが、現況更地の今なら市民の「目に見える形」で記念すべき足跡を示すことができます。

造営時から1000数百年にわたり小室台地の土の中で眠り続け、初めて底辺部の姿を現した全長32mの前方後円墳の価値が大層なものか、ごくありふれたものか、受けとめは公園を訪れ、輪郭を目にする子供たち、大人たち1人ひとりに委ね、文化財への関心をより深めてもらうのも現実的かつ正味の実態に即した一策です。文言では無く、生の跡地がそこにあります。

史跡指定から記念公園へ、その方向転換は先に述べた7月4日、文化課職員の説明を受けた際、その面前で決まりました。後に小室地区連絡協議会として正式に決定し、本件要望に至っています。地元では、それほど熱意をもって記念公園の実現が望まれています。

3. 市民の共有資産「船橋小室台遺跡記念公園（仮称）」の活用について

(1) 「体感できる古墳時代」を学ぶ校外学習の現場として

小室台古墳群3基のうち、唯一更地として残っている前方後円墳の出土エリアを「船橋小室台遺跡記念公園（仮称）」として整備していただければ、古墳の平面的輪郭を「目に見える形」で具体的に示すことができます。

小中学校の校外学習の場にいただければ、前方後円墳のあった場所に実際に立ち、墳墓を築いた古代の人々の営みに思いを巡らせることができます。

「江戸城を作ったのは太田道灌だが、実際に築いたのは大工と左官」という例えもあり、教科書などからの文字情報だけでは得難い、「体感できる歴史現場」になります。児童生徒たちの記憶に長く残るのではないのでしょうか。

後世から過去を俯瞰するのが歴史授業なので、ややもすると年表の表層をたどる知識先行型になりそうですが、実際に現地に立つことができれば、そこは古墳時代の人々がまさに前方後円墳を築いていた場所であり、土を運び、盛り上げる人々の息遣いや額の

汗さえ想像できる空間です。次代を担う子供たちにとって、ふるさと船橋に寄せる感性をより豊かにすることができます。

前方後円墳出土跡地の3. 2km南西には船橋市立ふなばしアンデルセン公園があり、春秋の校外学習の場として连接的に利用することもできます。

(2) 生涯学習フィールドワークの場として

シニア世代をはじめ、船橋の歴史に関心を持つ市民は少なくありません。小室町では現在、地元市民有志が一般向けに「こむろの里めぐりウォーク」を不定期に開催しており、船橋市内外から参加者があって好評です。

北総線小室駅前をスタート、ゴール地点とし、ボランティアガイド役の先導で小室台遺跡のある台地や鎌倉末期に起源をもつ旧小室村、古墳群の威容を想像できる神崎川の田園風景などを巡る約2時間半のコースです。途中、前方後円墳出土地と古墳時代の竪穴住居跡には必ず寄り、説明がなされています。

前方後円墳の規模が輪郭線で明示されれば、公園としての癒しの場だけでなく、生涯学習のフィールドワークの場にもなります。ベイエリア都市・船橋市の有する多面性、奥深さは古墳時代の歴史という「引き出し」にもあることを「目に見える形」で分かりやすくアピールできます。

(3) 北千葉道路・船橋小室インターチェンジ（仮称）整備に伴う将来性について

前方後円墳の出土跡地は国道16号線と同464号線の立体交差点から北東側へ約600mにあります。北総線小室駅からは直線距離で約450m、徒歩6、7分です。

将来、北千葉道路の船橋～市川間自動車専用道（設計速度80km/h）が開通し、船橋小室インターチェンジ（仮称）が整備されれば、都心ならびに東京外環自動車道と成田空港方面を最短経路で結ぶ道路交通網の要衝が生まれます。

とくに、船橋小室インターチェンジは北千葉道路総延長約43kmのほぼ中間地点にあたり、関連施設整備の適地でもあります。自動車専用道と一般道路の両方から出入りできる分離型駐車場を併設すれば、サービスエリアやパーキングエリア、道の駅などをはじめ、より広域、多方面からの来訪者を受け入れられる大規模アリーナやバスターミナルなどの候補地にもなり得ます。

また、▽地盤の安定性、▽津波被害や河川氾濫、液状化現象の心配がない地勢、▽成田空港と都心のほぼ中間にあり、インターチェンジに接続する国道16号線によって南北方向へも輸送展開できる立地は、内閣府が進める首都圏広域防災拠点整備の東側内陸部における候補地にもなり得ます。

平成30年3月に移転した東京電機大学千葉ニュータウンキャンパス（印西市武西学

園台2) 跡は船橋小室インターチェンジ予定地の東約3km、車で約5分の距離にあります。現在はキャンパス敷地、校舎ビル、パラボラアンテナ設備用屋上鉄塔、グラウンドなどがそのままあり、船橋小室インターチェンジとリンクさせれば広域防災拠点エリアとして機能を互いに補完することができます。

北千葉道路整備事業に関連して、首都防災を担う国直轄事業が加われば、千葉県が主体となっている北千葉道路整備事業の追い風となる可能性があります。具体化に向けて、沿線最大の都市・船橋市の主導的役割が要といえるのではないのでしょうか。

船橋小室インターチェンジ予定地の南側一帯は都市計画上、市街化調整区域なので用途が限られていますが、インターチェンジ新設に伴い近接地域に限り線引きの見直しが必要であれば、より多角的、効果的な高度土地利用が可能になります。

本件陳情の記念公園整備についても、面積は小規模とはいえ、将来、これら周辺整備の枠組みのなかでさらなる活用方法を見出すこともできます。

小室町は土地有効利用の将来性について、船橋市のなかでも特に多様な潜在力を現に有するエリアといえます。

以上の次第ですので、せっかく確認された船橋市の前方後円墳初出土跡地を「船橋小室台遺跡記念公園(仮称)」として早期に整備し、持続的利用を通じて後世に憂いなく伝えていけますよう、本件陳情について貴市議会のご理解、ご助力をぜひ賜りたく、船橋市小室町住民を代表して重ねてお願い申し上げます。

以上

